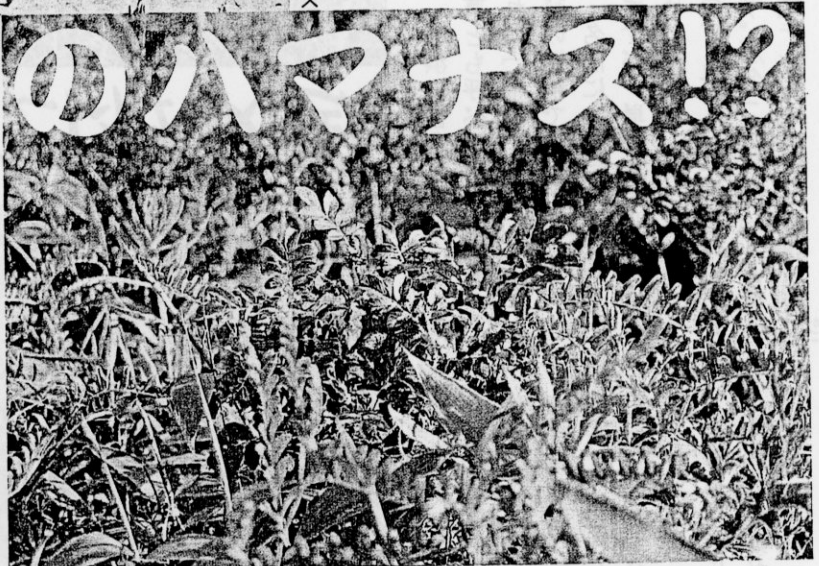


■文化財・博物館開設準備室 ☎0133-72-6123
e-mail: bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

紅葉山砂丘で発見されたハマナス

5000 年前のハマナス!?

馬追に縄文時代のハマナスが咲く―その話を札幌市のフリーライター、貫井進さんから教えていただいたのは今年の春先のことでした。ハマナスと言えは石狩浜。北日本の海岸に自生する植物の代表格です。ところが馬追は、長沼町や由仁町、千歳市などにまたがる内陸の丘陵地で、海からは二十〜三十kmも離れています。そんなと



馬追(長沼町)に咲くハマナス。「マオイ」とはアイヌ語で「マウ・オ・イ」=「ハマナスの实の多い所」という意味。フリーライターの高井さんは、アイヌ語地名と縄文時代の地形との関係を調べています。

ところで一体なぜ、ハマナスが咲くのでしょうか。しかも、縄文時代の?!

答は簡単。縄文時代の前半、そこが海岸だったからです。今から一万年前、五千年前、石狩市や札幌市などの低地部は「古石狩湾」という海に覆われていました。その海岸線は馬追丘陵まで達していたのです。このハマナス群落は、周辺に他の海浜植物やカシワもわずかに残っていることから、当時の植生が受け継がれていると考えられています。古石狩湾の名残が意外な形で馬追に生きていたのです。

石狩市内を花川から生振、美登位へと伸びる紅葉山砂丘は、今では海から五、六kmも離れています。しかし五千年前までは立派な海岸砂丘でした。馬追にハマナスが咲いているということは、紅葉山砂丘のどこかにも咲いているはずでは？

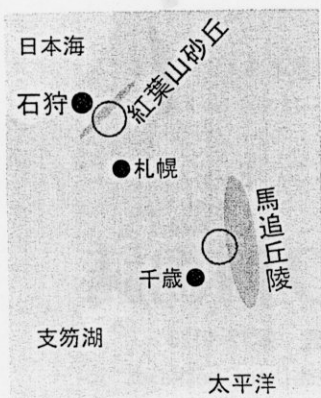
「馬追のハマナス」を聞いてからというものの、ヒマを見ては砂丘を歩き回りました。ハマナスはなにか、ハマナスはないか……。付近に住む人たちからは、だいぶ怪しまれたのではないかと思います。そしてとうとう見つけました！

砂地の露出した日当たりのいいところ、に、たくさんの赤紫色の花を

つけたハマナスが、ぽつんと生えていたのです。その時、五千年前の渚が目の前によりみがえりました。

ハマナスの生育地は海岸砂地ですが、鳥によつて種子が内陸まで運ばれることもあるそうです。今回発見した紅葉山砂丘のハマナスが、本当に五千年前から続いているものなのか、鳥が運んできたのか、それとも誰かが植えたのか。それはわかりませんが、どちらにしても五千年のタイムスリップを味わわせてくれました。石狩と札幌の境界にある屯田墓地へ自衛隊演習地の意外と目につきやすいところにも生えているので、みなさんもハマナスを捜して砂丘を歩いてみてはどうでしょうか。

(志賀健司)



内陸に咲くハマナス。一万年前〜五千年前、どちらも海岸だった場所